

編集後記

▼三月十九日、研究所創立二〇周年記念祝賀レセプションは他県の教育研究所代表と多数の会員の参加を得て、フルート演奏も好評で成功裡に終わりました。また教基法改悪阻止の決意を改めて確認しました。今号、八一号は二〇周年に向けて、新たな第一歩です。

▼斉藤進さんの論考は、本県高校生の進路問題を包括的に分析して、フリーターやニートの増加と企業の雇用政策、政府の青年雇用対策費の僅少等を資料で裏づけ明らかにします。

▼三ツ井富士夫さんは、県の十二一年間に亘った「大学等進学率向上対策事業」を高校現場の変化と関連して、大学進学の意味を改めて問い直すことを提起しています。

▼三輪定直さんは、豊富な資料を駆使して日本の親が高すぎる教育費に痛めつけられており、それは二十一世紀「知識中心の社会」の存亡に関わる問題で、特に無償教育の実現、給与制奨学金の導入は国民的政治課題と強調

▼長井芳朗さんは、六〇年代後半から今日までの県内高校の変遷をあとづけて県教委の中期高校再編整備計画（〇五年～十九年度）を批判的に分析します。それを補う形で藤田

昭さんが、「中高一貫校が持つ問題点」を取り上げ、内山雄平さんが「総合高校の特色を生かす」には何が必須条件かを解明しています。小島寿夫さんが「単位制高校で学ぶ子どもたちの問題」を報告します。

▼小林朗さんは、これらの論考が解明している最近の高校問題は、けっきょく中学校における受験競争をいっそう熾烈にして、矛盾を広げている実態を明らかにし、義務教育で落ちこぼれる子に悩み、苦悶する教師に期待

▼堀内順子さんは、かつて関わった高校生の燃え尽き症、不登校、引きこもり、などを彼らの声で伝えます。「親の会」を十年余もつづけていることに支えられているのでしょう。

▼河合靖久さんは、長岡市教委が「二期制を導入しよう」と急いだのを、「時間をかけて慎重に検討を」という声を市民運動で高め、その問題点を明らかにした活動を報告します。

▼随想「七十にしてなお樹を植う」は、八木三男さんの「現代の死」についての考察です。古典の詩やフィリップ・アリエスの大著などから引き、自身の病とも関わらせて、じつは「生きる」を探求します。

▼岡野勉さんの論考は、「基礎・基本」が備えている普遍性・一般性とともに教えられ、学習されるならば、必然的に楽しい授業にし得るといふことを、小教と分教の学習を例にし

て論証します。「量をとらせたか」「保田小の実践がいまに問うもの」を併せて読んで頂くとさらに理解できるでしょう。

▼今井楠男さんは、シリーズ「臨床現場からの報告」3を中越大震災に遭遇した、ひきこもりの五人の方の事例を取り上げ、読者にも考えて欲しいと問題提起しました。

▼シリーズ「教師は何をしなければならぬか」の亀山裕さんの実践は、今号が完結編です。巻西中学校の生徒会が主体となって「いじめ」を激減させる、感動的なまとめです。

(小島 吉田)

にいがたの教育情報 NO. 81

2005年3月25日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX(025)228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さぶびす

本誌内容の無断転載を禁じます。